今治歴史散歩

大成経凡

第三回　今治の電気・ガス事業の創始

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第三回は、今治の電気・ガス事業のおこりについて紹介し、明治末から大正期頃の今治産業界を歴史散歩したいと思います。

●今治財界人の発電事業

今治の地で、一般用・工場用向けの電力供給が始まるのは、明治末期のことです。当時の今治は、綿ネルを中心とした織物業が盛んで、明治三〇年代に織機・起毛機の機械化導入が始まっています。この動きは、今治で最初にタオル製織を始めた阿部会社（阿部平助）を牽引役として、四〇年代以降加速します。織物業における産業革命が、今治を近代商工都市へと発展させていきます。

長谷発電所の水槽遺構
（玉川町長谷／三島神社境内）

明治三九（一九〇六）年九月、阿部光之助・八木春樹らの実業家によって、今治電気㈱が創立され、同四〇年一一月に長谷発電所が竣工します。それは、蒼社川上流の越智郡九和村長谷に設置された水力発電所で、規模は有効落差約一八・三メートル・出力一八〇キロワットでした。送電は同年一二月から開始され、当時の今治町と越智郡陸地部を供給地とします。松山の伊予水力電気㈱・湯山発電所の開業（同三六年一月）から、四年遅れの電気事業でした。

●事業の進展とライバルの出現

明治四二（一九〇九）年八月、今治電気㈱は織物工場群に近い市街地へ、出力七五キロワットの蔵敷火力発電所を増設します。これは、不足する電力に対応したもので、さらに西条・加茂川水系にも新たな水力発電所の建設を計画します。しかし、これが西条水力電気㈱の計画と競合したため、愛媛県知事の調停によって両社は合併。同四四（一九一一）年一〇月、越智・周桑・新居三郡を供給地とする愛媛水力電気㈱が誕生し、阿部光之助がこの代表に就任します。

一方、電気事業にやや遅れ、ガス事業も主要都市で開業していきます。松山が明治四五年一月、今治が大正二（一九一三）年五月に供給を開始。光之助は、その今治瓦斯㈱の創立（大正元年一一月）にも尽力しますが、開業直前に代表権は八木亀三郎が握ります。当時、亀三郎は愛媛県有数の資産家で、製塩業を軸に多角事業を展開する波止浜財界のリーダーでした。

伊予ネル創始者・矢野七三郎像
（明治44年竣工／今治城吹揚公園内）
※竣工時の銅像建設委員長が阿部光之助

●光之助（今治）と亀三郎（波止浜）

光之助は、阿部平助の弟で、伊予綿ネル同業組合長や今治商工会議所理事長を務める今治産業界の実力者でした。さらに今治町長・県議会議長（憲政会）も経験し、愛媛県政にも影響力をもっていました。一方の亀三郎も、波止浜村長・県議会議員（政友会）を経験し、今治商業銀行の頭取でもありました。今治・波止浜財界の競合が、今治の近代産業を育んだのかもしれません。

今治市が誕生する大正九（一九二〇）年、愛媛水力電気㈱は鈍川発電所（五一五キロワット）を竣工させ、長谷発電所はわずか十数年で役目を終えます。伸長する電力需要に、出力が追いつかなくなったのです。

ちょうどその頃、今治は「四国のマンチェスター」と呼ばれるようになっていました。